

醫西與
傳鈔

上海
上

8
1-125

F
1-24



490.9
I 9-2

No. 2283

1246

13 1

橘皮 二斤

藟佳香 六斤

白朮 七斤

茯苓 八斤

其中 九斤

山藥 十二斤

天白附 十三斤

縮砂 十五斤

木香 十六斤

醫學秘傳秘卷上

○分量規矩

一斤

十六兩為斤和劑指南及ビ序例等諸書同十六兩ハ百六十目ナリ。八兩ハ即チ八拾目ナリ。正傳ノ斤例ニ用ホ一盞即チ今白茶盞也。約計半斤之數餘做此云云是ハ半秤ノ法ニテ八拾目ヲ一斤トシ五錢目ヲ一兩トスル者ナリ。

竹田家ニ右ノ正傳ノ法ヲ用ルナリ

一斤



類經曰唐孫真八千金方曰四分爲兩合今之六
錢也十六兩爲一石此則神農之秤也吳人以二
兩爲一兩隋人以三兩爲一兩今依四分爲一兩
秤爲定也云云

張機思邈神農等秤八拾分一兩十兩張介實ノ

一兩ハ六錢目ヲ用ルナリ。鍼灸聚英ニ云古之

一兩者今之四錢強也云云

甲本ニハ。近ゴロ。四分三厘ヲ一兩トス。異説ハ

類經ニ詳カナリ。

一瓜

本草序例曰六銖爲一分云云一銖ト云ハ二分
五厘ナリ。六銖合テ一分五厘ナリ。然ルトキハ
一分ト六銖ト同者ナリ。所注意ナリ

一瓜

小瓜ト同キナリ。一錢目ノ十分一ヲ一分ト云
ナリ。又三瓜一ヲ取テ小瓜ト云イ。三分ニヲ取
テ十分ト云フ。學者意ヲツクベシ

一斗

後ノ外ノ字ニテ註脚ス外ヲ十積テ斗トス

一斗

三因方ヲ以テ此ヲ推スニ。開元通寶百二十四錢
ハ。水一升ノ重サナリ。今五錢ヲ以テ一兩トス
ルトキハ。水亦半ヲ減ズ。此ノ時ハ六拾二錢ヲ
以テ水一升ノ重トスルナリ。百二十四錢ノ十
分一ヲ。水一合ノ重トスルナリ。但開元錢一錢
ノ重サハ。二朱四累ナリ。是レ則水ノ分量ナリ。
或ハ半夏一升ハ五兩ニ准スト云々。不知何レノ外
何ノ兩ヲ用テ爲スト云フ事ヲ吟味スベキ事
ナリ。開元通寶藥味分量ノ作ヤウ序例ニ見
エタリ。又綱目序例ニ外合ノ義詳カナリ可考

一合

開元通寶一錢ヲ見ニ。徑八分。重サ二朱四累也。
唐朝高祖ノ武德四年ニ始テ鑄出スモノナリ。
此ヲ十積タル重サヲ。一合ト云ナリ。又水以テ

一束

本草序例ニ曰。其草一束トハ。重サ三兩ヲ以テ
正ト爲ト云云。

一把

和劑指南ニ曰。一把者重二兩爲在云云。序例

梧桐子

梧桐子許ト云フ者ハ重サ十四兩ヲ取ル。鯉魚ノ目比之ス。本冊序例ニ詳カナリ。鯉魚目ノ白珠ヲ以テ准ズ

團子

彈子ト同ジキ也。彈丸及ビ雞子黃ト云ガ如キハ。四十梧桐子ヲ以テ准ズ。序例又唐本冊茶ノ條下ヲ取考

綠豆

ブンド夕_レ用。ゴサメ用云モノナリ。

一錢

入門釋方一_レ字散ノ註ニ目_レ方ノ一_レ錢ハ四字ナリ。一_レ字ハ二分半也ト云云。

一銖

二分五厘ナリ。諸方書ニ見エタリ。又入門一卷ノ註ニ三_レ朱ハ是レ今ノ一_レ錢二分半ナリト云云。此ノ時ハ一_レ朱ハ大抵四分餘ト云者ナリ。綱ニ_レ算術ヲ以テスルトキハ一_レ朱ハ四分一_レ厘七毫ナリ。銖未_レ聞

麻子

細麻子許ト云フ者ハ重サ四兩ニ取鯉魚ノ目

ノ白珠之ニ比ス。本州序例ニ曰大麻子許ト云
加肴ハ重サ六兩ヲ取ル。鯉魚目比之ト云云

一劑 全ク其藥品配合シタル總目ヲ劑ト云。

一貼

一服 一劑ノ義ナリ。綱目ニ時珍ノ曰。今古異劑。
古之一兩用今一錢可也云云。一服ヲ一錢目ニ
スルノ義ナリ

一盞

和劑指南曰。凡煮湯云水一大盞者約一升也。一

中盞者約五合也。一小鐘者約三合也云云。大盞
トハ建盞ノ大ナル者ナリ。中盞トハ建盞ノ八
分ナリ。小盞トハ建盞ノ六分ナリ。古ヨリノ口
傳ナリ

一碗

一鐘

一盞ト同シ見前

一字

一朱ト同義ナリ。二分半也

入匣十盞

王機微義 同

傷寒六書 同
直指方 同

古今醫統 同
婦人良方 同

千金方 同
醫統正脈

濟世全書
古今醫鑑

眼科
和書明鑑 先生

日誌中揀方 同人 右同前

東垣十書 六錢半也

類經

和劑局方
丹臺玉案
青囊真方 先生

○附錄 此考父玄瀛初心ノ窮子ニ移所ナリ

外合之分別

和劑ノ方等ニ水一外ト云ルハ開元通寶一百

二十四文ノ重サナリ。諸書ノ中ニ水一大盞ト

云フ者ハ一外ノ事ナリ。一中盞ト云フハ五合

ナリ。一小盞ト云フハ三合ナリ。五合ノ水ハ六

十二文目ナリ三合ノ水ハ三十七文目ニ分也

然レハ當流ニハ半秤ニテ合藥ヲ量ル故ニ

水モ宋ノ五合秤ヲ一

外ト定ムルナリ

圖之枕并下



束把之依量

諸方ノ中ニ甘草一把ト云ハ重サニ兩ヲ定ト
ス
其州一束ト云ハ重サ三兩ヲ以テ定トス且ツ
半秤廣稱ノ分別アルベシ

廣稱ノ一分ト云ハ二糸五分一兩ト八十糸一
斤トハ百六十目ナリ
半秤ノ一分ハ六朱ナリ重サ一糸二分五厘ナ
ル四分ヲ一兩トス重サ五糸ナリ十六兩ヲ一
斤トス重サ八十糸ナリ

尺寸之定

開元通寶一文ノ徑八分然レバ十二文半ヲナ
ラベ連テ其長サヲ一尺ト定ムル也
和劑方ナドニ寸尺ヲ云ルハ右ノ法ヲ以ス然
ラバ當流ノ秤ニテ合藥ヲ量ラバ方申ニ甘州

尺桂一尺ナド、云ルハ五寸ヲ入ベシ自餘ノ事是ニ准ノ知ルベシ本綱序例ニ曰凡ノ方ニ桂一尺ヲ用ト云フ者ハ皮ヲ削リ去重サ生兩ヲ正トス甘州一尺トハ二兩ヲ正トストアル也

方寸ヒトハ散藥ヲスクフ所ノ器ノ名四方各一トホアリ一トホハ一トホニスルノ一トホトハ方寸トハ方寸ヒトハ十分ニスルノ一トホトハ大ノ如シト有アリ

醫學秘傳抄上終

醫學秘傳鈔下

六十味藥性辨斷

○此藥性辨斷ニ凡テ藥品六十味ヲ載タリ。如此ニ記セバトテ唯今諸病ヲ治スルニ六十味ノ外ノ藥ハ不用此六十味ニテ治方ハ盡ク足ルト云ニハ非ス。諸家ノ本草ヲ見ルニ藥品繁多ニシテ一ニ其功能ヲ記憶シ難ク且諸藥ノ主治甚多クシテ一藥ニテモ諸病ヲ治スル如シ故ニ初學粗キ藥ヲ取病ニ對メ惑アルナリ。然レ右ノ主治ノ内ニ專要ナル功能アリ。專要ノ功能ヲ得心スレバ外

ノ功能ハ皆推ノ知ルベシ。滋府ノ鉄ヲ引塊白ノ
芥ヲ拾フ類ニ至テハ。其功能明白ナリトイヘ。然
ル所以ノ理ハ。聖者ニ非ズバ得テ知リ難シ。今茲
ニ集タル六十味ハ。平生使ヒ覺テ深功アル藥ノ三
擧タリ。此後トテモ。驗ヲ經タル藥アラハ補イ入ル
ベシ。右ノ通ニヘシ此文段ハ諸家ノ本州ニモ依之。氣
味功能共ニ試タルヲ集ル故ニ。本州ト差タル事
多シ。此外ニ本州拔書トテ。綱目ノ諸説ノ要語
ヲ集タル書アリ。此藥性辨論拔書中ノ要語ヲ擧
タルナリ。

中焦穀府

予ガ家傳ニ內經拔書ト云書アリ。其書ニ三藏ヲ
分ツ。第一ニ中焦穀府ヲ以テ本トセリ。故ニ此藥性
記ニモ。其例ニ從テ。中焦ヲ本トシ立タリ。藥ノ次第
ハ金石州木ヲ分タス。中焦穀府ニアツカル藥ヲ前
後ナシニ書集タル者ナリ。異朝ニテモ。東垣ナト諸病
ヲ治スルニ脾胃ヲ本トシ方ヲ立ツ。今予ガ家ニモ其例
ニ倣治方ヲ施スニ脾胃ヲ專要トス。其故ハ人身先
天後天ノ氣ト云者アリ。今日先夫ノ元氣ヲ養テ一身
ヲ保ツハ皆此後天ノ氣ヨリ生育スルナリ。其後天

六神農本草經天論三十一其發天

元氣ト云ハ此脾胃ノ儀ナリ。故ニ今日ノ治療ヲナ
スニモ中焦穀府ヲ本トシ。外感内傷上焦ノ病
モニ胃ノ府ヲ不可忘其ワケハ諸藥先ツ胃ノ府ニ
入テ後一身へ遍ク布散スルナリ。今病入テ試ルニ能
食スル者ハ重病ニテモ痊ユ不食ノ病ハ輕クテ
ケ敷ナリ。是胃ハ一身ノ本ナレバナリ

橘皮 焙ル

味苦辛氣微温利水穀清痰

中焦順和之要藥ナリ

○此藥ハ神農本草經ニハ橘皮ト有テ青皮陳皮ノ分

或先佳ノ口
授ニ云此ニ
橘皮ト出
シタル俗ニ
云フ橘皮
皮ナリ。橘
ハ其性強
ノ新シキハ
病人ニ遣
テラキニ年
經多シ用
故ニ陳又
心ニテ陳
皮ト云。今
日本ニ蜜
柑皮多陳
皮トノ用
ル誤也。異
如クニ云陳
皮ハ橘皮
ニハ橘ハ柑
本ニテ柑
子ナリ故ニ

チナレ。今爰ニ橘皮ト云ハ本州經ニ橘皮トアルニ本ツ
キテ立タリ。人毎ニ皆陳皮ト覺テ來ルヲ爰ニ橘皮
ト書クニ心アリ。本朝ニテ陳皮ト云陳ノ字ニ泥ミテ
古キヲ用ユ且六陳トテ諸藥ノ中ニ古キヲ用ル藥六
種アリ。橘皮モ其仲ナリトテ泥ミテ。何程モ年久キ
シ能トノ使用ルナリ。予ガ家ニハ甚古ハ反テ藥切ナ
キト覺ルナリ。故ニ二年過タルハ不用。陳皮ト云ニニ
説アリ。採修テ陳タル者ヲ陳皮ト云又陳ノ字ヲ青
皮ノ青ノ字ニ對シ。木ノ上ニ有時イマダ青キ時ニ採
青橘皮ト云能熟ノ後採シ陳橘皮ト云説アリ。此方

此處三陳
皮ヲ橘皮
トシ其誤
ヲ正シホス
トナリ

ニ後ノ説ニ從テ用ユ故ニ三年ヨリ古ハ不用ナリ。又竈
ノ上ニテ焙タルヲ不用其故ハ陳皮ノ正キ香ヲ失ヒテ
反テ惡キ香ヲ求ムルナリ。湯ニテ洗ヘ。焙ノ香ハ失セ
又者ナリ。唐ノ陳皮ハ皮厚キナリ。是ハ古キモ可宜カ。
本朝ノ橘皮ハ久キハ不值ナリ。今藥店ニアルハ陳皮
ニアラサルモノ。枳殼橙久年母ノ皮ナトヲ雜ニ賣ナリ。ヨ
ク吟味スヘシ。陳皮ヲ洗フニ湯ニテ強ク洗ヘハ性弱
ク成テアシ。能洗フハカリナリ。又久シク水ニ漬シテ
置ヘカラス。但ヤワラカニ成ニテ漬シ置ベシ。是又氣ノ脱
ヌタナリ。諸藥其心得アルベキナリ。留白ト去白ト

分チアリ。是說異國本朝其ニ用ル事ナリ。留白ハ
脾胃ヲ補ヒ去白ハ能ク氣ヲ循行スル也。此方ニハ
凡テ去白ヲ用ルナリ。留白ニテ補ノ理ナシ其故ハ
生ノ時自ミハカリヲ味テ見ル。絶テ何ノ味ナシ味
ハ外ノ薄皮ニアルナリ。此ニ依テ見レバ留白ハ陳皮
ノ功ヲ元メ脾胃ノ氣ヲ行スニ益ナシ。何ゾ性ノ弱キ
留白ノ者ヲ用ヤ。○焙 陳皮ツヨク焙ラスノ必シ
濕リ氣ノアル内ニ舉。金物ナドニ入テ其底燥ク程
ニ焙ルベシ。藥カノヌケヌ程ニスルナリ。今和藥ノ分量ヲ
見ルニ小服ナルハ一分。大服ナルハ五分ニ過ス。是

シ一服ニ十味程ノ藥劑ニスル時ハ一味ノ分量ツツカ
ナリ。然ル上ニ加味ナトスル時ハ彌一味ノ分量減スルナ
リ。如此ニハ藥力ノ多ク少クニ製法ヲナス時ハ何ノ功
モナキナリ。惣ノ諸藥凡ニ能心ヲ付テ藥力ノ脱マヤ
ニスル事專要ナリ。○味苦辛氣微温 全躰苦ク
シテ此辛味ヲ兼ヌ。此氣味外へ布テ香ニキ匂イア
ルナリ。凡ソ此氣味ニ付テ意味アルベシ常ニ藥ヲ用
テ病ニキクト云事。香ト氣味トニ因ル。萬ノ氣味香
ヲ外へ煎シ出シ用テ。其汁胃府へ入テソシヨリ功ヲ
アラス。是皆氣味ノ功ナレバイヨク、氣ヲ付ヘシ此藥

性記ニ載タル氣味ハ。今時試覺テ。神農本經及
諸家本州ニ合タル者ヲ載ス。又本州ニ依ズ平生
試得テ。氣味ノ功アルヲ提舉タルモアルナリ。故ニ本
州ノ氣味ニチガイタル所アリト知ベシ。○利水穀清
痰 是ハ神農本經ノ語ナリ。藥味ハ神農本經ニ
本トス本經ニ此陳皮ノ性義ヲ云述タル故ニ卷頭ニ
置ナリ。○中焦順和之要藥 此陳皮ハ中焦ヲ順
和ストアルガ專功ナリ。味ノ苦ヲ以テ中焦ヲ推シ。
辛ト香トヲ以テ脾胃ノ氣ヲ循ズナリ。此香ヲ以テ中
氣ヲ開ク助ケトナルナリ。外ノ功ハ皆是ヨリ出タル

者ナリ。凡藥ニ專功ハ一ツカニツカナラズテ多キ者ナ
リト心得ベシ世人藥ハ一品ニテ幾多モ功アリト覺
エ又妙藥ナド興ニ腫レバ温メ熱ニ用レバ涼ムルト云
フ皆然リトシテ信仰シ用ユルナリ。藥ハ一方ニ好バ一
方ニハアテク。一病ニ能ララス時ハ一病ニ毒ナリ。兩用
ニ功ハ十キ者ナリ。利水穀清痰スルトハ痰ハ中焦順
和セズ。津液留滯ノ生不故ニ今中焦ヲ順和スルト
キハ水穀ヲ通利シ津液ヲ行ス故ニ其依痰自ヲ消
ス。二陳瀉ハ痰ヲ治スルノ要劑ニテ陳皮半隻ノ二味
ナリ。陳皮ハ中焦順和ノ藥ニ水穀ヲ利ノ痰ヲ清ス

ルナリ。香蘇散ハ陳皮ヲ以テ發散ス。是モ中焦ヲ
順和スル事專用ノ功ニテ痰ヲ治シ汗ヲ發スルハ其
末ニテ順和ノ中ニ自然トコモルナリ。前ニモ辨ズル如
ニ諸本州ヲ見ニ二味ノ藥ニテ萬病ヲ治スルヤソニ
書タリ。然レモ一藥ノ萬病ヲ治スル事ニ非ス故ニ
家傳ニ二味ノ中ニテ一ツニツ程ノ肝要ノ功ヲ用テ
其末ハ自然ニ推シ知ルヤソニスルナリ

藿香 忌火

味微辛氣微温治吐瀉

中焦順和之要藥

○此藥異國ヨリ來ルハ香々ヌケザル爲ニ苦カキニ
 テテ來ルナリ。能士氣ヲ洗去テ用ユベシ。久シク水ニヒク
 スベカラス。湯ヲ以テ洗ト云説ハ甚アリ。○忌火。惣
 テ葉ノ類ハ火ヲ忌ム。其薄輕ナルヲ以テ得火ト
 キハ。其氣脫ヤスキ故ナリ。又香ノ甚シキ者モ火ヲ忌
 ナリ。○味微辛氣微温治吐瀉中焦順和之要藥
 此藥モ辛温ニシテ香氣ヨリ功能ヲナシ。中焦ヲ順和ス
 ルノ要藥ナリ。故ニ吐瀉霍亂ニ必ズ用之。陳皮藿
 香臣ニ中焦順和ノ藥ニテ。治痰スルニ陳皮ヲ用ヒ。
 吐瀉ヲ治スルニ藿香ヲ用ルナリ。如此ノ委細ナル分

チ。如何ナル道理ト云事ヲ考知難シ。聖者ハ其理
 分明ナルベシ。最今強テ理ヲ付テ見バ理モ有ベシ。
 陳皮ハ苦故ニ推ス事ツヨシ。故ニ利水殺積痰スル
 功アリ。藿香ハ辛キ味カ強キ故ニ氣ヲ順スル事多
 故ニ吐瀉ヲ治スルナド、云所ニテハ云ハルベケレモ精ク
 分明ニハ辨セラレズ。又種々ノ理ヲ付タル説アレバ其
 理分明ナラス。如此ナル所ヲ強テ理ヲ付ルハ反テ
 アキナリ。人人用ル所ニ付テ委細ノ功能ヲハ自然
 ト知覺スベキナリ

白木 燒

味微甘微苦氣微温

補益中氣

○此藥古ハ白木蒼木ノ分チナシ素問ニモ木トニ出
タリ。神農本草經ニモ木ト有テ蒼白ノ別チナシ三種ニ
分ツ。後世ノ沙汰ナリ。古根ヲ白木トシ。新根ヲ蒼
木ト云説アリ。其ハアシ。二種ニノ二種ノ者ナリ。此藥和
漢ニヨリテ味ノ差別アリ。和ハ苦事甚シ漢ハ苦ニ
甘ヲ兼ルナリ。今用ルニ漢ヨリ來ル者宜キナリ。○焙
燥シ焙ベキナリ。○味微甘微苦氣微温。此藥ハ
參ホドニナケレバ餘程餘味有テ甘ト苦トノ外ニ

辛^{カラキ}トイワレヌホド強キ味有。此ニ依テ補益ノ功ア
リ。○補中益氣 第一中焦ヲ補タメニ用ユナリ。中
焦ノ鬱滯或ハ濕アル者ニハ蒼木ヲ用ヒ。白木ヲ用
ズ。唯脾胃ノ虚ヲ補フニハ白木ヲ用ルナリ。此等ノ事
ヲ不知バ加減ト云事ナルマヤ也。白木ノ汗ヲ發スル
功アルハ中焦ノ元氣ヲ補フ時ハ汗發スル者ナリ。惣
テ諸藥^テニ發散ノ功アルハ大方中焦ヲ補フ藥ニ
テ汗發スルナリ。其故ハ藥汁胃ノ府入中焦ヲ強ク
補益スル^ハ裏ヨリ外ニ達シ^ハ浦スル故ニ汗ヲ發スル
ノ理アリ。此白木ハ中焦ヲ補益スル事專功ナリ。本

人參ニ近キ者ニテ其功人參ニ不及

茯苓 焙

味淡微甘氣平

調和中焦又有除濕之功

○此藥淡味ヲ本トシ用ルナリ。惣ノ淡味ハ甘味ノ中ヨリ出タル者ナリ。甘味ノ薄ヲ淡ト云然ル時ハ淡ハ甘ヲ兼ルノ理アリ。五味ニ淡味ヲ加テ六味トナルナリ。平トハ寒熱温涼ノ偏ニ名ヲ付難キヲ平ト云ナリ。○調和中焦又有除濕之功。前ノ陳皮藿香ハ味ノ苦辛ニテ中焦ヲ推グラス故ニ順和ト云白木ハ甘味ニテ

脾胃ヲ補フニ補益ト云此茯苓ハ味淡平ナル故中焦ヲ調和スト書ナリ。其所以ハ茯苓ハ平出ルノ食物ヲ以テ脾胃ヲ調ヒニ似リ。故ニ調和ト云白木ナドノキンハリト不定ヲ補フ如ニハ非ズ。諸藥凡ニ淡ハ濕ヲ除ク功アリ。茯苓澤瀉木通ノ濕ヲ除ク功アリ。此モ味ノ淡ガ故ナリ。脾胃ノ損ノ泄瀉スルニ茯苓ヲ用ルハ脾胃ノ濕ヲ泄メ水道ヲ利シ水穀ヲ分利スル故自然ト泄瀉ヲ止ル功アリ

甘草 生

味甘氣平

緩中解毒但性緩而泥膈且減藥力宜用
又其桔湯治咽喉痛

○大甘州小甘州二種アリ。大ナルヲ佳トス。小ナルハ功ア
レ。小甘州モ味ノ甘事ハ同ケレド其性宜シカラサル
故ニ天ヲ用テ宜ナリ。鹿皮ヲ削去ベシ○味甘氣平性
ハ平ナリ。此藥ハ唯甘味ヲ專要ニ用ルナリ。古來生ト
灸トノ使分チアリ。古入ノ云ク。生ハ寒灸レバ温故ニ火
ヲ濕スルニ生ヲ用ヒ。補ニハ灸タルヲ用ト云ヘリ。今試ル
ニ火ヲ濕スルニ生ガ寒ナリトテ用テモ寒ニモアラス。中ヲ
襍トテ灸ガ温ト不見唯火ヲ濕シ中ヲ襍フ則甘州

ノ功ナリ。依テ家傳ニハ生ニテ用ユ灸ル事ナシ。生灸ノ
ニツラ用テ寒温ノ功ノ差別ナキユナリ。諸藥ヲ製ス
ルニ勿論古ヨリノ製法ヲ用ユベシ。今甘州ハ生ト灸トニ
因テ寒温ノ相違ヲ覺エサルユヘ生甘州ヲ用ユルナリ。
諸藥トニ製法ノ事如此心得ベシ○**緩中解毒**コ
ノ緩中トハ甘ハ以テ物ヲユルメクツログルヲ云。今甘
味ノ膈膈ニ泥ヲ以テ見ル時ハユルムルノ理知ヌヘ
レ。膈膈ノ氣ヲユルメ泥ニ滯ラシムルナリ。種々ノ功
能アリトイヘド皆甘味ノナス所ナリ。解毒トハ
諸藥ノ毒ニ當フルヲ解スルナリ。毒ヲ解スルニ

品々アルトイヘ也。甘州ハ性甘ノ諸藥ノハケレク
 スルトナル氣ヲユルメ解スルナリ。○但性緩而泥膈
 味甘メ緩ムル者ユヘニ胸膈ニモタレテ泥ヤスシ故ニ以
 積アル者酒客ノ人ニ忌ナリ。○且減藥方宜以
 用。甘州ハ諸藥ガ中ヘ不入ハ少ナリ。其故ハ
 藥ハ皆毒アル者ナリ此毒ヲ以テ病ニ對メハ功
 能ヲナス。是ヲ以テ藥トスルナリ。藥一味ユトニ毒ナ
 キハナシ。人參黃耆ノ類トイヘ也亦毒ナリ。諸藥
 ヲ合テ劑トナシ用ユレバ一味ノノ毒氣タカイ相
 爭テ不調。然レバ病ヲ治スル事アタワザル耳ニ非

却テ災ヲ生ス。其所ヘ甘州ヲ加ユル時ハ諸藥ノ
 スルトナルモ緩ニ和テ以テ互ニ輔佐シ其功ヲアスハ
 スナリ。故ニ諸ガニ甘州ヲ用ルナリ。必シ可用多ク
 用ユベカラス。然レ方ニ因テ多用ルアリ。又スキト用ザル
 アリ。寒涼ニ毒ノ甚キ藥劑ニハ必多加スベシ小兒
 ノ初出ニ黃連甘州ノ二味等分ニノ用ル者ハ惡露
 ヲ去シタメナリ。此時甘州ヲ多ク用ルハ黃連ノ寒
 胃ヲ害セン事ヲ恐テナリ。又藥ガノ峻ニカケレキ事
 ヲ欲スル時ハ甘州ヲ用ユベカラス。味ノ甘ニ藥ガヲ
 ユルメラレミシキ爲ナリ。又甘州ノ一味ヲ用テカアル

事アリ。小兒ノ腹痛ニ甘草ノ一味ヲ用テ治スル事
 ハ其癰ノ急迫ナル所ヲユルユナリ。又淋病ニ味
 用テ治スル事アリ。是癰アリテ急迫ナル所ヲユル
 ムルユナリ。又癰ニ甘草ノ一味ヲ用テ截ル事ハ邪
 氣ト正氣ノハゲシク相争フ所ヲユルメ治スルユナリ。
 凡藥劑ヲ調ント欲セバ。各味ニ心ヲ致スベシ。假
 令バ。甘草黃連等ノ偏ナル味ヲ多ク藥劑へ入
 ル。時ハ煎湯偏ニ苦ク。或ハ偏ニ甘ノ病者飲ム
 ニ堪難キ者ナリ。且又其劑ノ味偏ニナル時ハ他
 藥ノ味ヲ失スルノニニアラス。他藥ノ功能ヲモ奪フ

方。故ニ藥カラ細ニ調劑セザル前ニ於テ。藥
 味ニ意ヲ委シ。苦味多キ時ハ甘ヲミシ。甘味多ク
 又辛味ハ或ハ苦味ヲ増スヤウニスベシ。○又甘
 桔湯治咽喉痛。仲景傷寒論ニ出リ。陰人症ノ咽
 痛ヲ治スル方ナリ。一名甘草桔梗湯。凡云ナリ。氣厥
 逆ノ上部ニ迫リ。咽喉ニ腫ユ。桔梗ハ上部ノ氣ヲ行
 ニ調フ。甘草ハ上部へ塞迫スル所ヲ甘ニテユルムルナ
 リ。右ノ証ニ風邪ヲ兼ル人ニハ防風煎茶ヲ加テ用
 ユ。如聖湯ト名付。是皆氣ノ迫ラユルムル切ナリ。
 甘草ハ寒温ノ性ヲ心ニ留メス。其味ヲ本トメ使フ

ナリ。家傳ノ秘方ニ百州中州ノ二味ヲ以テ熱瘧
ノ甚シキニ用テ截斷スル事百發百當ス此ニルメテ
熱毒ヲ解スルノ功ヲ見ル其忽ニスル事ナカ

山藥 性忌鐵

味甘氣平

補中氣強陰

○山藥ハ上ニ石灰ヲヌリテ有ニ能ク滌イヌトシテ鐵
三焙ルベシ○忌鐵 鉄ヲ忌事古ヨリ種々ノ説アリ物々
諸州木ノ類ハ皆鐵ヲ忌ナリ其理ハ金克木ノ故ニ藥
功ヲ弱クスルナリ神農本草經ニ鐵ヲ忌ノ事ナキハ

古ハ改阻シタルニ鐵カシ用イガハナリ金ノ中ニテ
鐵ノ性ハ最強シ故ニ諸藥ノ中ニテ鐵ヲ忌モノハ銅
カシ用ユ銅ハ鐵ヨリ性弱キニ因テ代ルナリ地黃ノ
如キ其忌事ノ甚者ハ竹カシニテ製ス諸藥共ニ銅
鐵ヲ忌トハイニ事ニヨリテ刻ニ難キ物ノ金類ヲ
忌サル藥ハ銅鐵ヲ用ユ然レモ古ヨリ忌タル藥ハ謹
守テ銅鐵忌ベシ其藥カシ減スレバナリ山藥トハ
殊ニ鉄ヲ忌事甚シキ者ナリ或説ニ腎ト肝トニ入ル
藥ハ鉄ヲ忌トイヘ此理ハ勝ラズ唯金克木ニ
忌ト云フ又理宜シ 味甘氣平 氣平トハイニ用温ナ

ルベシ。○補中氣強陰。此中ヲ補フト云ハ白朮ノ補益トナシガナリ。是ハ茯苓ノ調和スルト同シテ強陰スル功アルハ中焦ヲ調和スル内ニ自然トシルヲイラ益メ。陰ヲ補長スル故補陰ノ劑ニ用ル也。蓋ニ真陰ヲ強スル功アルニアズ。中古ノ說ニ大陰脈經ニ行ト云ヘ凡亦證ニ難キ説ナリ。

香附 忌鐵

味微苦微辛氣平

行中焦之滯氣故曰開鬱

又曰治頭痛與川芎性異

此藥ハ上ノ毛ヲ去テ石臼ニ搗碎キ用ユ。鉄器ヲ忌ムヘナリ。今世上ニヨリ香附子ト云テ凡ニ搗クダキ毛ヲ去タル者アリ。此ヲ好ト云然凡藥店ニテ製スルモノヨリ香附子ハ大ニ鉄ヲ侵シテ毛ヲ去ニ毛火ヲ以テヤクムヘヨゲ過テ藥効ヲ失フナリ。故ニ不買唯自家ニテ鐵刀ヲ以テ毛ヲ去ニテハタキ碎テ用ユベキナリ。○味微苦微辛氣平 味苦辛トイハ凡モツヨクハナキナリ。性温トハイヘ凡平ナリ。○行中焦之滯氣故曰開鬱 中焦ノ鬱滯ノ氣ヲ推シ行スニ用之其効ヲ騰ハ中焦ノ滯氣ヲ行シ又食滯ヲ行

スニ鬱ヲ開ク功自然ト其内ニアリ。別ニ鬱ヲ開ク
ノ功アルニ非ス推ス處ヨリハ行ス功強シ又香蘇散ニ
配合テ汗ヲ發スル事ハ此藥ノ直ニ汗ヲ發スルニ非
中焦ノ滯氣ヲ行スニナリ。中焦ノ氣ヲ行シ鬱滯シ
開ク功アルニニ婦人ノ聖藥トスルナリ。婦人ハ男子ト
チガイ鬱滯ニヤスキニ因テナリ。此藥ヲ童便ニテ製シ
用ル事アリ。婦人ノ血ノ道下ノ氣ノ閉滯スルニ用テ
最宜ナリ。便製ハウルラス功アツテ烈シキ功ナケレバナ
リ。○又曰治頭痛與川芎性異頭痛ヲ治ストハ食
滯或ハ胸膈ノ滯ヨリ起ル頭痛ニ宜シ風邪ノ頭痛ニ

斐ス川芎ト性異トハ鬱ヲ開キ頭痛ヲ治スル事同
性ノ如シレモ川芎トハ各別チガイアリ。川芎ハ味辛
ニテ上ヘ外ル性強シ故ニ風邪ナドノ頭痛ヲ發散シ
治スルナリ。香附子ノ治スル頭痛ハ食滯或ハ上中ニ
焦ノ氣ノ鬱滯ヨリ發スルヲ云香附子ノ症ニ川芎ヲ
用ユレバ上ヘ取外セ嘔吐ヲ生ズルナリ。

縮砂 炒

味辛氣溫

治泄瀉腹痛進食安胎順行中焦之滯氣故也。
内熱吐衄等不可用之。

此藥膜ヲ去テ炷ナリ。大凡香ノ有モノハ此ヲ思メ凡
 此藥ハ炷ニモ其香不脱ニナリ。○味辛氣溫味イ
 辛ノ与イヨドツキモノナリ。中焦ノ藥ニテモ甚温ナ
 ル者ナリ。○治泄瀉腹痛此藥ハ性温ナルヲ以テ泄
 瀉腹痛ヲ治スルナリ。同じ推シ行ス藥ノ中ニテモ香附
 子ハ性不温故ニ其功ナシ。縮砂ノ泄瀉ヲ治スルハ脾
 胃ヲ温メ行スニナリ。腹痛ヲ治スルモ其理同じ。大
 腹痛ハ寒熱ノ症有テ寒ヨリ起ル事多シ寒症ニ
 ハ此藥可ナリ。熱症ハ不宜○進食 味ノ辛ヲ以テ
 氣ヲ行シ性ノ温ナルヲ以テアタメテ食ヲ消シ胃口

ヲ開ユヘニ食ヲ進トイヒリ。○安胎 黄芩ハ寒藥
 ニシ胎ヲ安ジ縮砂ハ温藥ニシ胎ヲ安ス。寒温各別
 ノ藥ニシニ味臣ニ胎ヲ安スルノ何如トナレバ。今婦人
 惡阻ノ証ナドアルハ中下ニ焦ノ氣塞滯スル故ナリ。
 凡婦人ハ毎ニ氣滯テ塞リ易キ者ナリ。然ルニ今胎
 ヲ受テ下焦ノ氣塞ユヘニ中焦ノ氣鬱シ易ク苦ム
 モナリ。然ル胎へ縮砂ヲ用テ胃ヲ推開キ。中焦
 ヲ温メ行ス時ハ胎自ラ安シ。性温ナル故ニ胎ヲ安
 スル上テ味ナシニ胎ニ非ス。黄芩ヲ用ルハ熱ニ
 ヲツテ其胎ノ不安ニ宜キナリ。扱香附子ハ中焦ヲ

順行^ス。其功^ト同^シ。ゴウナレ^ル。必^ズシチガイアリ。香附子^ノハ推^ス行^ス功^トヨク。縮^ム砂^ハ温^メ行^ス。方^ガカツヨキ也。故^ニニ香附子^ハ強^ク。腹^ナトリ^ル。下^ルニハア^レ。○内熱吐血^等不用^之。血^ハ熱^ヲ得^テ行^モナリ。此藥^ハ性^ハハ大^ク温^ニ行^ス功^ト強^キ。ユヘ吐血^血等^ニ忌^ナリ。

木香 忌火
味辛苦氣微温

順行^ス中焦^之滯氣^最能^ク治^ル腹痛

治^ル痢疾^與枳^榔同^用

此藥^ハ香^ヲ于^テ要^トシ^テ用^ユ。故^ニ火^ヲ侵^セ。ハ香附

ス火^ヲ忌^ムナリ。○味辛苦氣微温 甚^ク苦^ノ味^シ辛^クヲ兼^ヌルナリ。凡^ソツヨキ苦味^ハ寒^冷ニ温^ハス。ナキ者^ナレ^ル。獨^ニ木香^ハ味^ハ苦^ノ然^モ温^ニ香^モ甚^クシキ者^ナリ。是^レ處^ヲ于^テ要^トシ^テ心^ヲ付^テ使^フベキナリ。○順行^ス中焦^之滯氣^最能^ク治^ル腹痛 苦^キ味^ヲ以^テ中焦^ノ滯^ヲ推^スト^ハ虫^ヲ推^スナリ。外^ノ苦味^ノ藥^ハ性^ハ寒^キル^ニニ脾胃^ヲ收^斂スル所^{アリ}。腹痛^ヲ治^スト^ハ腹痛^ハ多^ク寒^{ヨリ}滯^テ痛^ムナリ。故^ニ木香^ノ苦^ヲ以^テ推^シ。温^{ナル}所^ヲ以^テアタ^メ行^スユヘ其痛^自然^トヤムナリ。黃柏^ナトリ^ノ如^キハ推^下ス所^ハア^レ。寒^涼ナルニヨリテ

不宜ヨク木香ハ腸痛ニ不限腸痛ノ滯ニ用テ宜キ
ハ推行スユヘナリ。○治痢疾與栝樹同用 古方多ク
木香栝樹ト同用ユサレ凡必ス木香栝樹ト限ルニ
ス。木香栝樹黃連トド、加味スル事モアルナリ。痢疾
ハ凡テ脾胃ノ積滯ヨリテ發スル故其積滯ヲ推テ
行スタズニ木香ヲ用ユ滯氣ナキ証ニハ多用ユヘカラス若
多用ルトキハ胃ヲウチ且甚レキ香ヲ以テ反テ元氣
ヲ走散セシムルナリ。是モ多用ルニヨツテ如右多力ニ
ル則ハ害ナシ。木香丸ニ木香ヲ主トシ諸虫ヲ治シ腸
痛ヲイヤスモ以上ノ加アルヲ以テナリ。

